

教育実習指導のあり方(2) —「めざす保育者像」に関する考察—

山本弥栄子*、小川友恵**、柴本枝美**

要約

小川(2008)の研究において事前事後指導の内容を省察した結果、学生たちは「実習での学び」を定着させてきたことが明らかとなった。

本研究は、研究1をふまえて「保育者に必要な資質能力」について調べた。実習生と幼稚園教諭現場にアンケート調査を実施し、保育技術の学びを捉えるために、実習生の実習ノートの分析を行った。その結果、実習生は高いレベルの「保育者像」をめざしているが、「自分自身にとっての保育者像」となると、「実際に自分ができる水準に見合った資質能力」と捉えてしまうことがわかった。それらを踏まえて本学の教育実習指導のあり方を考察した。その結果、専門的技術だけでなく、子ども理解、人間理解を含めた能力が必要だとわかった。

キーワード：教育実習、実習指導、幼稚園教諭の養成

2009年10月7日受理(教育研究)

第一章 問題と本研究の目的

1. 本研究の目的

入学当初の学生は保育者や幼稚園教諭という名の保育者像については優しく、子ども好きであれば良いというイメージをもっている。しかし、近年子どもを生き育てることが困難に感じられる社会において、保育者や幼稚園教諭に求められる役割は大きくなってきている。保育職は教育、養護、カウンセリング、看護といった様々な面を持ち合わせ、常に高める必要がある。その為には仕事に就いてからの自己を高める努力が必要な専門性の高い職業なのである。しかし、短大という養成課程2年の短い期間ですべての専門性をマスターできるものではない。保育者や幼稚園教諭の資格を取得することはスタートラインにたっただけに過ぎない。幼稚園教諭として十分に出来るわけではない。

だがそのスタートラインに発ったときがとても大切である。どういった目的をもって、どのように学んで

いき、どんな保育者像をめざしているかによって大きく成長が違ってくる。

保育者としての能力は経験を重ねていくことで身につく技術や技能もあるが、日々の実践の省察を行うことによって培われていくものである。保育者は毎日の子どもとのかかわりや子どもの生活の中から様々な悩みや疑問を抱きそのことについて同僚と話し合いながら課題を見つけ、実践の改善に取り組んだりする。また問題意識や文献研究や講演、研究会、他の保育者の実践報告会や研究などから示唆をうけ取り組んでいくこともある。まさに実践研究者である。

本研究の目的は、保育士や幼稚園教諭を養成する短大として、保育現場に保育者を送り出す立場として、学生が幼稚園現場というスタートラインに発った時、どんな保育者像を描いていくのか、また現場が求めている保育者像について調査し、今後の教育実習における指導の方向性の改善に寄与していくことである。

*大阪健康福祉短期大学

連絡先：山本弥栄子

〒590-0014 堺市堺区田出井町2-8

大阪健康福祉短期大学 子ども福祉学科

E-mail:Ymmt-ye@kenko-fukushi.ac.jp

**大阪健康福祉短期大学

2. 2008年度の教育実習の振り返り課題—くめざす保育者像—について

幼稚園教諭二種免許状取得による教職課程として初めて履修する、第一期生（本学二期生にあたる）の教育実習指導では、幼稚園実習Ⅰ及びⅡを終えた後の事後指導において、教育実習指導1単位、幼稚園実習4単位の締めくくりの課題として実習報告会を設け、すべての履修学生が「私のめざす保育者像」を発表した。この実習報告会は、2年間の学びの最終まとめでもある。ねらいは、①他の学生の発表を真剣に聞くことで、自分の体験を客観的に捉え直し「自分のめざす保育者像」を形成していく、②さまざまな実習経験の総まとめとして、学生一人ひとりが実習をやり遂げたことに自信を持ち、4月には社会人として自立する自分をイメージすることである。

一人一人の学生が演台で、「私のめざす保育者像」を話す態度は、1年生の時には見られなかった姿であり、成長した様子を見せた。

保育士や幼稚園教諭を養成する短大を卒業した学生の役割は、幼稚園教諭免許状または、保育士資格を取得した後、即戦力としての活躍が求められている。保育者としての基本的姿勢を身に付ける指導をすることが必要とされる。学生は、保育者としての資質を理解し、自らの特技などに照らし合わせながら自己の課題を見出し、努力解決していくことが自らのめざす保育者へと成長する。

「私のめざす保育者像」のなかで、必要な特性として学生がどのようなことを考えているのかを発表の中から抽出してみた。全学生の実習記録を振り返って分析したところ、学生の捉えた「私のめざす保育者像」に見られる特性は、次の12点に集約された。「笑顔」、「子ども理解」、「礼儀」、「行動力」、「責任感」、「信頼」、「人間性」、「専門的知識」、「保育技術」、「コミュニケーション」、「積極性」、「忍耐強さ」の12項目である。

実習を終えて学生たちの振り返りから、次の保育者に求められている特性を抽出してみた。

「将来に役立つことをたくさん学んだ～出来れば私が保育した子どもたちの中に一人でも私のような保育者になりたいと思ってくれる子どもがいればいいな～その為に今から努力していかなければならないことは、まず言葉遣いです。」と礼儀の大切さを強調している。

一番多くの学生が大切にしたいこととして子どもと

のかかわり方、話し方をあげている。子どもに接する保育者の姿としては、笑顔で子どもの目線に立つことであると捉えている。

「担任の先生のようにいつも笑顔でかかわり、子ども達の意見や気持ちをしっかり受け止めて担任の先生が、私の目にはとても立派に映り、やっぱりプロなんだと実感したのと同時に、私もいつかこんな保育者になりたいと思うようになった。」

何よりも子どもの気持ちを理解していきたいと言っている。

「今この子が、これがしたくなく、あんなことしたいんだと子どもの行動から子どもの気持ちを読み取れる保育者でありたい」と、一歩深く捉えて、「子どもは、皆違っていて～その中に個性があるのでそれを見つけて光らせることができるようになりたいのです。～一番重要なのが子どもの気持ちに寄り添うということ～」

常に子ども達のために努力している人は子どもへの責任感を持っている、と捉えている。

「何よりも子ども達のかわいらしさ、げんきな姿を目にすることにより『保育者になりたい』というおもしろい、より一層強くすることができました。2年間のすべての実習を終えて私は大切なことをたくさん学びました。私にとって保育者とは『常に子ども達のために努力している人』です。」

さらに子ども達に慕われ、信頼される為には次のように述べている。

「子ども達は、大人を見ているのだから～（中略）～一生懸命子どもと接し、自分自身が楽しもうと思えます。中途半端な気持ちで保育するのではなく、積極的に保育というものを理解し、頑張って働きたいです。」

人間性の大切さについては、次のように表現している。「あなたなら変わると信じ、子どもとともに取り組んでいる姿がありました。私はその保育士を見て感動し、～（中略）～保育者という職業は、その人の人間性が最もよく出る職業だと言われますが、本当にそうだと思います。こうなりたい、こう変わりたいと思うことで、自分自身が成長できたり、保育の質が上がると思います。」

保育の子どもに対する思いや願いは、実習園での保育者に憧れ、尊敬したことを自分の将来に重ね合わせて考えている。その内容は、自分ができるということが基準になっているようである。技術であるとか専門

性に対しては、自分の保育者像に重ねている部分が少ない。でも、環境に関することや発達などの専門的知識に対しては、今後理解を深め、勉強していくべきであると言っている。

「子ども達が安全に安心して暮らせる環境作りや、子どもの発達につながっていくような保育をすることも大切な仕事～そのために広い視野を持つ～」

「そのクラスの実態と発達の段階をきちんと理解していないと、保育は成り立たない。理解できる保育者になりたい。」

また保育技術を子どものために身に付けたいと願っている。

「深くいろいろなことを、年を重ねるうちに学んでいく必要がある。～遊びや教材のあり方、環境構成など～発達段階や季節に合わせた歌や手遊び、絵本など具体的な教材を身に付けたい。」

学生は、保育のことだけではなく、職場の人間関係についてもコミュニケーションが大切だと考えている。

「やさしく面白い先生だけでは良い先生になれないと思いました。保護者とも関わり、先生同士の連携もすごく大切だと思います。どんな壁があっても一つの方法でなく～頭で考えるだけでなく行動することも大切だと学びました。」

そして自分自身に対しても厳しく評価し、今後の課題として行動力や積極性を挙げている。

「子どもや先生の言動にどういう意味があるのか、ねらいを考える～何事に対してもなぜ?と疑問を持ち、ねらいをしっかりと理解することを今後の課題にしようと思います。」

「今のままではだめだと思います。精神的に強くなって、いろいろなことを経験していき、人の良いところを吸収して行って、自分のものにしていけるようになりたい。」「子どもから学べる保育者になりたい。」周りの人々を尊敬し、保育者の仕事に誇りを持って忍耐強く頑張りたいと言っている。

「私の目指す保育者像は、母のように粘り強く、夜回り先生のように子ども一人一人を社会の宝として大切に育て、大切に育てていける保育者～(中略)～保育士という仕事に誇りを持って頑張ります。」

保育者になろうとする者が抱いている保育者像は、学習内容や学習プログラム、学習課程に反映する。

自分自身が保育者として考えるとき、客観的に求め

られているということと、自分の能力との誤差がある。学生が自分自身の持つ保育者像と、保育者の特性という点に相違が見られる。保育者としての育成は、学生がどれだけ保育者が求められる資質や能力を理解し、日々学習の中で「めざす保育者像」を明確にして必要な能力を身に付けるかということである。実習指導のなかで援助することによって、理想の保育者像に近づけることが求められている。

保育者像とは、多岐にわたり理解しがたい。幼児理解・保育の技能・幼児に対する知識・人間性など多様にわたっており明確に定義づけや整理がされていない。「幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書」(2002)では、幼稚園教員の資質について、次のように示されている。「幼児一人一人の内面を理解し、信頼関係を築きつつ、集団生活の中で、発達に必要な経験を幼児自ら獲得していくことができるように環境を構成し、活動の場面に応じた適切な指導を行う力を持つことが重要である。また、家庭との連携を十分に図り、家庭と地域社会との連続性を保ちつつ教育を展開する力なども求められている。その際、幼稚園教育が小学校以降の生活や学習の基礎の育成につながることに配慮し、幼児期にふさわしい生活をとおし、想像的な思考や主体的な生活能力などの基礎を養うことに留意する必要がある。言うまでもなく、これらの教育活動にかかわるにあたっては、豊かな人間性を基礎に使命感や情熱が求められる」。このような記述は、学生にとって保育者像の捉えとしては難しい。「保育者像」と保育者の特性との関連は、保育士や幼稚園教諭を養成する機関では、どのように扱われているのか、先行研究について分析してみた。

3. 先行研究の視点

中村(2005)は、保育学生が保育者に必要と考える資質能力について調査し、保育学生が理想とする保育者像を明らかにした。また、それぞれの資質能力に対する自己評価、実習体験、職業観の違い、性別等によって保育者像に違いが見られるかを考察した結果、もっとも多かったのは、「笑顔」(76.6%)で、「優しさ」(45.2%)、「健康」(42.7%)「子どもへの愛情」(35.5%)「体力」(35.5%)と続いている。保育学生の大多数が保育者に必要な資質能力を「笑顔」、「明るい」、「元気」、「優しい」といった感覚的、抽象的イメージから捉えており、保育学生の理想とするのは、「健康で優しくいつ

も笑顔の保育者」という保育者像を抱いているといえる。また、資質能力別に整理すると、身体的資質能力を除くと、「性格」、「子どもへの愛情」、「保育者としての使命感・意欲」、「対人関係に関する能力」など能力・資質の面に集中している。専門的知識・技術や知的能力などの能力的な側面は、それほど重視されておらず、「一般教養・常識」は非常に低い値になっている。また、中村（2007）は①専門的知識、②子ども理解、③保育技術、④指導力、⑤行動力、⑥礼儀、⑦コミュニケーション、⑧愛情、⑨笑顔、⑩優しさ、⑪明朗性、⑫元気、⑬厳しさ、⑭思いやり、⑮信頼、⑯積極性、⑰健康、⑱体力、⑲責任感、⑳忍耐強さなどについて保育者の資質能力を分析した。

保育者を目指す学生に対して、保育者の役割を認識させ、保育者としてのあるべき姿について調査した浅野（2003）によると、学生が抱いている保育者像は、「いつも笑顔で」、「子どもの接し方がいいで」、「元気があり」、「同僚の先生方とも協力し合っていて」などであり、保育者としてのみならず、人として基本的に大切だと思われる資質を持った人物像であった。さらに「保育に関する知識を豊富に持ち」、「保育を工夫しながら」、「クラスをまとめ」、「場面によっては子どもをきちんと叱って、善悪を教え」などの保育の専門家としての資質にも着目していることが伺えた。これは、学生が抱いている保育者の資質として、まず人として望ましい資質、そして保育の専門家として望ましい資質の両面が含まれていることを指摘している。つまり浅野（2003）は、学生が現場の実習や実習指導を通して、保育者のあり方について基本的視点を学び、保育者はどうあるべきかを現実にも自分のこととして考えることができるようになってきていることを示唆した。これらの先行研究を踏まえると、「本学のめざす保育者像」から抽出した特性は、保育者としての資質能力として捉えられる。

4. 文部科学省の「保育者像」および「資質向上の捉え方」

教育職員養成審議会第一次答申「新たな時代に向けた教員養成の改善方策について」（1997）では、「いつの時代も教員に求められる資質能力」として、①教育者としての使命感、②人間の成長・発達についての深い理解、③幼児・児童・生徒に対する教育的愛情、④教科等に対する深い理解、⑤広く豊かな教養、⑥こ

れらを基盤とした実践的指導力の6項目が挙げられている。

幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書（2002）の「Ⅱ 幼稚園教員の養成・採用・現職の各段階における課題と展望」では、幼稚園教員に求められる資質向上の課題として、「1 養成段階における課題と展望」として、(1) 養成段階における基本的視点、(2) 教員志望者自身の多様な体験・得意分野の素地の育成、(3) 実践力の育成、(4) 教員養成のための教育環境の充実、(5) 上級免許の取得、免許状及び資格の併有、(6) 幅広い幼稚園教員志望者の確保、の6つの点について述べられている。

この報告書が作成された社会的背景には、少子化、核家族化などによる幼稚園を取り巻く環境が変化する中で、幼稚園教員に求められる専門性として、幼児を内面から理解し総合的に指導する力、保育の具体的内容を構想する力、実践力、得意分野の育成、特別な教育的配慮を要する幼児に対応する力、地域社会や小学校と連携・協力する力などが幼稚園教諭に対する社会的要請となっていることが伺える。

このような幼稚園教諭に対する社会的要請に応じるための必要性は、新たな養成課程の設立準備につながるることとなる。さらに保育士や幼稚園教諭を養成する機関としての教育課程としては、第53回中央教育審議会（平成17年12月）では、「教職実践演習（仮称）」の新設・必修化の計画が2011年度よりある。この「教職実践演習」とは、教員としての資質能力の最終的な形成と確認を目的としており、「教員として最小限必要な資質能力の全体について、教職課程の履修を通じて、確実に身に付けさせるとともに、その資質能力の全体を明示的に確認する」ことをあげている。具体的な方策としては、教職課程の中に新たな必修科目「教職実践演習（仮称）」を設定し、その具体的な内容としては、教員として求められる4つの事項（①使命感や責任感、教育的愛情等に関する事項、②社会性や対人関係能力に関する事項、③幼児児童生徒理解に関する事項、④教科等の指導力に関する事項）を含めることとなっている。

これらの今後必要とされる教育課程の内容を受け、就学前の幼児を教育する幼稚園では、実際にどのような保育者像が求められるのか、保育士や幼稚園教諭を養成する短大としても検討し、現場や社会の要請に応じていく人材を育成する必要がある。

第二章 「めざす保育者像」についての研究

1. 幼稚園実習履修 二期生のアンケート結果

本研究では、保育者をめざしている学生が将来をどのように見通し、どのような保育者像をめざしているのかについて調べるために、中村（2005）が用いた調査項目に基づいて幼稚園教諭養成2年目である本学の子ども福祉学科の保育学生に対してアンケート調査を行った。

アンケートの質問項目は資料1の通りである。回答者数は52名、うち、女性40名、男性12名であった。

資料1 本研究で実施したアンケート項目

幼稚園教諭像に関する調査項目

1. 保育者に求める資質能力について

保育者にとって必要なものを次の20項目の中から6つ選んでください。

(中村(2007)の資質能力に関する項目を参考にした)

- | | | | |
|--------|--------|------------|-------|
| ①専門的知識 | ②子ども理解 | ③保育技術 | ④指導力 |
| ⑤行動力 | ⑥礼儀 | ⑦コミュニケーション | |
| ⑧愛情 | ⑨笑顔 | ⑩優しさ | ⑪明朗性 |
| ⑫元気 | ⑬厳しさ | ⑭思いやり | ⑮信頼 |
| ⑯積極性 | ⑰健康 | ⑱体力 | ⑲責任感 |
| | | | ⑳忍耐強さ |

2. 将来の姿をどのように描いていますか

卒業して1年後、3年後、5年後の自分を何をしていきますか。(自由記述)

(1) 学生が保育者に求める資質能力について

アンケート結果に関して、多い順で、1位は「子ども理解」(78.8%)、2位は「愛情」(51.9%)、3位は「保

資料2 実習生の実習ノートの記述内容(実習ノート内の「一日の実習日誌」のまとめ欄)

実習生A(男)
<本時の反省> 初めに、みんなをイスに座らせるときに、全員一緒に座るように言ってしまう、みんながぶつかったりしたので、何か安全にいくように考える方がよかったと思う。子どもたちが絵を描く能力をもう少し先生に聞いてからの方がよかった。プレッシャーを一人ひとり肩に回す時に時間がかかりすぎて、みんなを待たせてしまった。フールツバスクケットを始めてから、みんなが寝くなりたという気持ちで考えず、寝くなりた気持ちで全然座ってやらなくて、全然進めなかった時の対応がうまくできず、自分が話してしまっていて、グダグダになってしまった。子どもたちも飽きた部分があったと思う。フールツバスクケットの移動の時に、子ども同士ぶつかったりしたのが、危なかったと思う。終了の仕方がうまくできなかったのが残念です。難しかったです。

<指導していた内容> 初めに、子どもたちを座らせる時に、クレヨンを持って行かせた方が効率がいい、子どもたちに待つ間の約束事を決めておく方がいい。移動の際も走らず、ゆっくり歩、机の片付けや次の行動に移る際は子どもたちをロッカーや壁の方に寄せておき、しっかり声掛けをする。入り口のドアを閉め、先生の声が子どもたちに聞こえるようにして、環境に応じて、窓を開けたりして、調整する。色を塗る際は、正確に決める色を、みんなに伝える。寝くなりた子どもどう声掛けをするか、遊び時間を決め、みんながスムーズにオノゴができるように考える。子ども達は、一つすることが良ければ集中力が持たないので、合間に手遊びなどを入れて、子ども達の集中を持続させるようにした方がいい、など指導していただきました。

<指導助言> ゲーム自体は、子ども達も喜んでいました。シミュレーションも行い、本番を迎えたいと思いますが、実際はうまく進まないこともあったと思います。良かった点は、今後も続け、指導していただいたり反省したことは次回に生かしてください。部分実習、お疲れ様でした。

実習生B(女)
<本時の反省> 説明するの苦戦し、なかなかジャンケンゲームのルールを理路整えてもらえず、同じ言葉は何回も繰り返してしまっていました。ルールの分かる子と分からぬ子に分けて3分間だけでも、直接説明すれば良かったなと思いました。その為、ルール説明が長くなり、「早くしよう」という声が聞こえてきました。また、カードを一枚取って後の人に回して欲しいというのが難しく、自分の前に取って欲しいという声も聞こえてきたり、自分の前に取って欲しいという声も聞こえてきたり、なかなか全員に行き渡りませんでした。一枚ずつ配った一列に並んでもらい、一枚ずつ手渡した方が良かったなと思いました。

<実習担当から指導していただいた内容>
・説明の言葉と絵の順番を短くする。…子ども達に話す際を与えにくいので、気持ちで話すといい。
・説明の時間をコントロールして、遊べる時間だけ長くする。…説明が長いと子ども達も飽きて、ざわざわしてくる。
・私語をするのを精励、こちらへ注目を向ける時の為、指人形や手あそびをいっつも準備しておく。…「静かに」など声で言うより、手あそびや指人形でキャラクターになりきり、誘う方が注目を向ける事ができる。

<指導助言> 反省にもあるように、ゲームまでの時間が長かったですね。どんなことを話そうか、どうやって子どもたちに伝えようかなど、自分の中でしっかり決めておく方がいいですね。また、頭の中で一度シミュレーションして、この動きが無理は無いか、スムーズにいくかなど、しておくと当日少し落ち着いて保育ができると思います。

実習生C(女)
<実習を終えての感想>
幼稚園は、保育園と違うところがたくさんありました。幼稚園はお昼寝も無く、おやつ時間もありませんでした。行事も多く、半日保育の日もあり、給食、パン、お弁当と言った曜日に分けてお昼ご飯が食べました。子どもたちがかわるのすく、年少(男)さんと、年中(男)さんのクラスに入り、年少(男)さんで声掛け、年中(男)さんで声掛けは、まだ違う声の掛け方で、そのクラスの中でも、一人ひとりに対しても声の掛け方は違い、すく大変でした。先生の声の掛け方を見て真似をし、少しずつ子どもと接することができ、関係を深めていくことが出来ました。ただ、子どもに声を掛けて答えてくれる子どももいますが、中には全く答えてくれない子どももいます。何回も声を掛けに行き、ほんの少しですが、顔を振り向き、うなずいたりしてくれました。声を出してお話したかったです。部分実習では、初めはグダグダで、全体の子ども達の様子を見たり、読みだけでなく、「感情を入れるのもよくなるよ」と、先生の方からアドバイスをもらい、何回かして、やと子どもに伝えたいことが言えました。手遊びや絵本を讀み、子どもはどう感じる、答えてくれるのか分からず、どのようにして答えたいのか迷ってしまいました。子どものことを分かるように、もっとも関わって、関係を深めることが大切だと思っているのですが、関係を深めることはすく難しく分かりました。

実習生D(女)
<実習課題についての反省> 子どもたちが集中するためには、手あそびや歌なども必要で、子ども達の気持ちの切り替えの手順になるので、手あそびをいくつか考えておかないと、と考えていました。でも、いざ子どもたちの前に立てると緊張してしまい、全然手あそびが思いつかなくなってしまいました。もとのたさんの手あそびを練習し、子どもたちと楽しく手あそびができるようにしておこうと思います。子どもたちが集中して話を聴くには、大きな声で全員に聞こえるように働きかけをしていかなければいけません。自分が思っていたよりも、子ども達は伝わらないのは、まだまだ声の大きさが小さかったからだと、先生に指摘され、なるほど、と思いました。これから、子どもたちに絵本などで語りかける時は自分が大きいと思う以上の大きさを語りかけようと思います。

<責任実習・指導内容についての反省> 子ども達に絵本を讀む時、子どもたちが集まり座って聞いてくれないので、私が絵本を讀み、体制をとってしまつたので、どんだん前に寄ってきて、読める状態ではなくなってしまい、子どもたちが絵本を讀むのを待つあげなくてはいけなかったな、と思いました。また、絵本を讀む時、発達の状態を考えて、文章の長さや絵のタッチなど、もっと考えるべきだったと思います。絵や文章が適度で、季節の絵本だと、とても集中して聞けていたので、季節感がある絵本も大切と感じました。読むと思っていた本をあまり練習できていない状態で讀んでしまい、讀むのに必死になってしまい、子どもたちの表情を見る余裕がありませんでした。なので、次回絵本を讀む時は、子どもたちの表情や絵本を見ている時の雰囲気などを見ながら、余裕を持って絵本を讀み、手あそびができるように頑張りたいと思います。

実習生E(女)
<責任実習・指導内容についての反省> 実習9日目に、絵本を讀ませていただきました。(「ほのくつあらへん」)子ども達の反応は、笑ってたり、語のオチが分かる「あっ！」などと、しっかり聞いてくれていたように思います。しかし、反省として、たさんの動物が出ていたので、その動物の鳴き声の特徴など、工夫して讀めば、もっと面白かったかなと思います。ただ絵本を讀むだけでなく、自分でアレンジすることによって、子ども達の反応が変わるだろうなと思います。そして、読んだカードが少し早かったかなと思います。もう少し落ち着いて、子ども達の顔(反応)を見ながら讀めば良かったかなと思います。読み終わった後も、た絵本を讀んでおしまいではなく、絵本に関連する話を付け足すと、もっと楽しくなるだろうなと思いました。学ぶことの多い経験になりました。

実習生F(女)
<実習課題についての反省>
・私の実習課題は、活動に応じて変化する子どもたちへの先生方の接し方を学ぶことでした。朝の登園時は、子どもたちが元気に朝の挨拶ができるよう呼び掛け、興奮して大きな声で喋っていたり、話を聞いてほしい時などは、大きな声を出して静かにするよう声を掛けよう方法だけでなく、逆に静かに落ち着いた声で落ち着いた声で声を掛け、子どもたちが静かに聞ける環境をつくることも大切だと知りました。朝や昼食、お祈りの際、などに歌う時、元気に大きな声で子どもたちが歌えるよう呼び掛ける時は、ただ大きな声で歌うだけでなく、工夫をし、子どもたちが大きな声で元気に歌い続けるよう声を掛けていこうと思いました。

・もう一つの実習課題は、自ら実習するということに努め、部分保育の際は、子どもたちが楽しく活動できるように、自らが笑顔で接することでした。実習という点では、汎山の部分保育を経験させていただき、毎日の朝の活動の中で絵本の読み聞かせをさせていただき、経験を積むことで、子ども達の表情や行動から、思っていることを感じていることを察することが出来るようになったと考えています。

<責任実習・指導内容についての反省>
・ゲーム遊び…この実習の中で始めた部分保育でした。しぼりとりをするので「しぼりとり」という人が手紙としぼり置いていくという設定で子どもたちは、とても喜んで「ドキドキする」と言いながら園庭へ出たり、終わった後もマンの音程度まで聞かれました。ゲームしている間は参加できない子もいること、終わった後話している間に、興奮している子どもたちをどのように集中して、こちらの話を聞かせるのが難しく、出来なかった点です。他にもルールを守れない子への対応が出来ていませんでした。

・絵本製作…前回の反省なども考慮し、静かに話を聞いてほしい時に、大きな声で聞かせるようにするのではなく、静かな声で落ち着いた声で語り、子どもたちが聞きたくなるように配慮しました。一行程少なく、上手に遊ぶように遊び方の説明などを入れました。しかし、しぼり取るときと同じく、園庭へ出た後話を聞いてほしい時、1ヶ所に全員がなかなか集まらず、集まらないまま話を聞いてしまいました。待つ子、集まらずに遊びでしまつ子、別々の事をしている子どもたちの指導の方法が、また今回も難しい点を感じました。集まらずに話を始めず、全員話を聞かせるように、この指導をいただきたいです。

・ピアノ…朝・昼・晩と3回あるピアノを2日間に分けて弾かせていただきました。子守唄から弾き、歌う子どもたちに合わせて弾き、挨拶までのピアノに必死にならず、子どもたちの様子を見ながら弾き難さを実際に弾くことで実感することができました。

・素話…笑顔で止まらずに、お話を子どもたちが楽しく想像できるように話しました。「大きなカブだったの、うんとこよ、どっこいよ」などの繰り返しのフレーズは、子どもたちと一緒に言っていることも1つの楽しさだと指導していただきました。

実習生G(女)
<一日の感想・反省> 今日はいよいよピアノ実習の事で頭がいっぱいでした。普段何気なくしている歌詞カードを私は自分で歌って補うなんてありませんでした。弾かず話まってしまう所を自分で歌って補うことで精一杯でした。緊張してしまつた、どかが間違っていたか全覚えているくらいです。普段の練習より弾けなかったの悔しいです。もっと練習して子どもたちをもっと楽しませる努力を身につけたいと思いました。実習をしてみても、私から見ていると、特に困る事はない普通している先生の行動ととても難し、事で大事なことということが分かりました。

<指導助言の助言>
・ピアノの歌詞カードは先生も練習するほど、難しい。
・出席を取る際、環境が変わって照れているだけなら返事を待たなくてもよい。

育技術」(50.0%)、4位は「信頼」(46.2%)、「健康」(42.3%)、「専門的知識」(42.3%)、「責任感」(42.3%)と続く。

図1より、学生が選んだ資質能力を高い順にあげ、その選択理由について解釈を以下に行う。

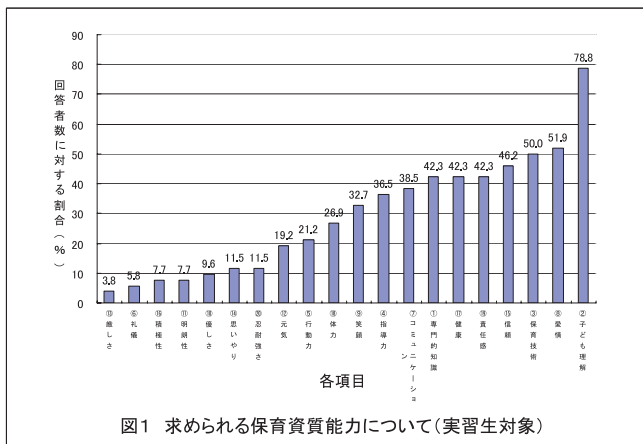


図1 求められる保育資質能力について(実習生対象)

①保育技術・・・「保育技術」が高く出た(50.0%)が、これは特に観察実習である実習I直後にアンケートを実施したため、自分の保育技術の無さを痛感したのではないかと考えられる。

②責任感・・・「責任感」は他の項目が上位に出た(42.3%)が、幼稚園教諭の結果と比べて「責任感」は低かった(59.3%)。これは、「実習生」という立場ゆえに、身近に自分自身が子どもの怪我や保護者への苦情などの対応に出会っていないので、感じられる機会が無かったのではないかと考えられる。

(2) 実習ノートから見る「保育技術」に関する学び

(1) で得られた結果で学生が保育者の資質能力として求める上位にあった「保育技術」について、学生が実習現場で書き記した実習ノートの記述(資料2)をもとに分析を進めていきたい(重要な箇所は筆者により下線を引いた)。

実習ノートから説明してみると、子どもの前に立つて10分から20分の実践指導を行うそれだけでもうまくいかない、実習生Cがそれぞれの年齢一人ひとりに対する声の掛け方の違いは、とても難しいと述べている。実習生Aなども、椅子に座らせるだけでもぶつかり合ってしまう、というようなことが起こる。移動する時にどんな風にどのような方法で、どの方向など、一つひとつの子どもの活動に保育者のシミュレーションが必要だと指導されていて、何をやってもうまくいかない、と感じたようである。実習生Dは、絵本選びを行う時は、発達の状態を考え、文章の長さ、絵のタッチ、絵や文章が適度で季節の絵などを考えて選ぶ必

要があると知った、と述べている。

実習生Gは、実習をしてみて、特に普通になっている先生の行動がとても難しいことで大事なことがわかった。実習生Eは、ジャンケンのルールを子ども達に理解してもらえず、同じ言葉を何度も繰り返しているうちに、ルール説明が長くなって、遊びへ入るまでに子ども達が飽きてしまった。ここでは、どんなことを話そうか、どうやって子ども達に伝えるか、などをしっかり決めておくべきだと指導されている。

実習生Eは、なかなか実習生の話を子どもに聞いてもらえない、難しい、また集まらずに遊んでしまう子どもへの指導をどうしたらいいのか、ピアノに必死にならずに子どもたちの様子を見ながら弾く難しさなど一つひとつに配慮する点、考えておくべき点、子どもへの対応、声掛け、ねらいなど、たくさんの保育技術の必要性を感じた。日々何気なく子どもとともに行動している保育者の姿が自分たちにとってどれだけ難しいことかを実感している。

(2) 卒業後の職業観(1年後・3年後・5年後)

将来も保育者として仕事を続けているという前提で、将来の自分の姿をどのように捉えているのか、また卒業後、どういう心構えを持って仕事を続けているのかについて尋ねたところ、1年後、3年後、5年後で以下のような回答が得られた。

各年に分けて分析した。年数ごとに特徴を以下にまとめた。

「1年後」

- 1 子どもに関わる仕事をしている。保育所か幼稚園で就職(アルバイト・非常勤含む)して保育者をしている。
- 2 保育所で働いていて、やっと一年がたったけど、まだまだ未熟。園(就職先)の仕事、業務を覚える。たくさん学んでいる。まだ未熟だが、仕事の内容を覚えて、次の目標に向かっていく。
- 3 保育者1年目としてしんどいことも多いが、しっかりと働く。下っ端で様々なことを学ぶ。就職でこてんぱん。就職し、仕事に責任をもち生活している。職に就き、もっと学んでいこうとしている。保育者1年目で必死に頑張っている。いろいろと悩む。新しい環境に慣れようと、初めての環境で頑張っている。とりあえず訳も分からず働いている。

- 4 保育所か幼稚園が合わなかったら積極的に自分に合う職場を探す。保育者として働きながらも、仕事や、子ども達に対してこのままでいいのかと迷いがある。
- 5 結婚願望はあまりない。
- 6 結婚をして家事をする。
- 7 保険や何やらでお金をためられずに悩む。
- 8 大学に編入学している。

1年後は、以上の8項目が抽出された。就職して仕事内容を覚えることで毎日が過ぎていく、と予想している。また、働き初めでもあり、仕事に対して前向きかつ新鮮な気持ちで取り組もうとしている姿勢が伺える。また、早々に職場が自分自身に合わない判断した者は、転職に向けて考え始める者や大学入学などの別の進路を選ぶ学生もいる。回答の中では、仕事に向けて日々を過ごしており、まずは新しい環境、仕事内容を身につけることと、経済的にも自立をめざしている回答が多かった。仕事について初めての経験が多く、自分の経験則というものがまったく無い中での勤務であり、周り（職場の先輩、上司など）から学ぼうという謙虚な姿勢が全体的に伺えた。

「3年後」

- 1 保育者として子どもと関わる仕事をしている。だいたい就職先（仕事）も慣れ、少し生活にも余裕が出てきて落ち着く。のびのびと保育ができるようになる。
- 2 クラス担任（副担任）になり、責任感を持って仕事をこなしている。経験を生かせるようになる。自分のいい所を出していき、積極的に働いている。子ども達を理解できるようになり、保育技術を高める。仕事にも慣れ、後輩を育てていく。
- 3 結婚しているか、まだ働いているかのどちらか。保育者として少し慣れてきた頃なので、結婚を考えながら働いている。
- 4 結婚して一時家庭に入る。寿退社して、新婚生活真っ最中。結婚して子どもを産む。
- 5 子育てと仕事を両立する。
- 6 違うところに就職している。転職している。
- 7 生活面ではある程度お金が溜まり自立。（一人暮らし、家は出ているかもしれない。奨学金返済達成。）

3年後は、以上の7項目が抽出された。職場や仕事

にも慣れ余裕ができてくる、と記述したものが多かった。仕事内容に自信を持ち、責任のある立場に就いている、後輩を育てるという視点が芽生え始める。また、「仕事」というものに対して、自ら積極的に取り組むなど、責任感を持ち始めている。また1年後の回答に比べて仕事以外にも家庭を持つ（結婚する、出産する）という回答が増え、仕事に対して余裕ができ、新しい家庭を構えるなどの気持ちが芽生え始めている。仕事との両立をしていく立場と、仕事を辞めて家庭に入るという2つの立場がある。生活への経済的自立（一人暮らし、奨学金返済）したい気持ちがあることが伺えた。

「5年後」

- 1 仕事続けている。保育士か幼稚園教諭をしている。子どもに関わる仕事をしている。
- 2 担任として、責任を持ち仕事をする。理想の保育者に向けてがんばっているかな。新入職員が入ってきてさまざまなことを教える。
- 3 余裕が出てくる。仕事にも余裕があり、いろいろな子ども達を見る立場に立つ。今までに足りなかったこと、できなかったことを深めていこうとしている。
- 4 結婚するが、子ども作らない。
- 5 結婚もして、家事・育児を頑張る。仕事も落ち着いてきた頃なので、産休に入り出産し、自分の子どもを育てる。子育て真っ最中。自分の子育てをしながら保育に生かせるようになっている。
- 6 子育てを一段落して復帰する予定。仕事復帰。
- 7 仕事が嫌になって、ハローワーク通い。転職を考えだし、少し悩んでいる。迷っているけど、耐えて、辞めない。
- 8 お金、100万以上貯めておく。

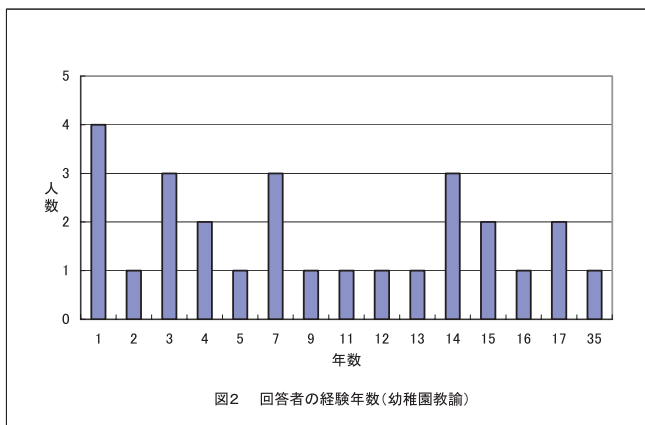
5年後は、以上の8項目が抽出された。仕事が落ち着くだけではなく、結婚や子育てをしているものが3年後と比べて増える。また、結婚して子育て最中である、とする者もいれば、子育てが終わり職場復帰すると考えている者もいる。いずれにしても、自分自身の生活だけでなく、新しい家庭、家族という環境の基盤をつくっていく時期となっている。全体的には、「5年後には、仕事を続けている」と考えている者が多く、仕事をやめて家庭に入るという選択をした者は少なかった。自分の仕事として責任を持って働き続ける意志

がみられる。

また、5年後には転職を考える者もいる。内容的には「仕事が嫌になって」、また「迷っているけど、耐えて」という表現に見られるようにその後一生をかけて続けていく仕事となるのかどうか、を模索している姿がうかがえる。ここには、「自分の天職」とするのか覚悟を決める時期に来ていると捉えられる。またその一方で5年間続けてきたからこそ、自分自身の得意、不得意な業務内容が自覚できており、保育者として自分自身が向いているを含めて自分自身に合った職業を考え直す機会となっているようにも捉えられる。

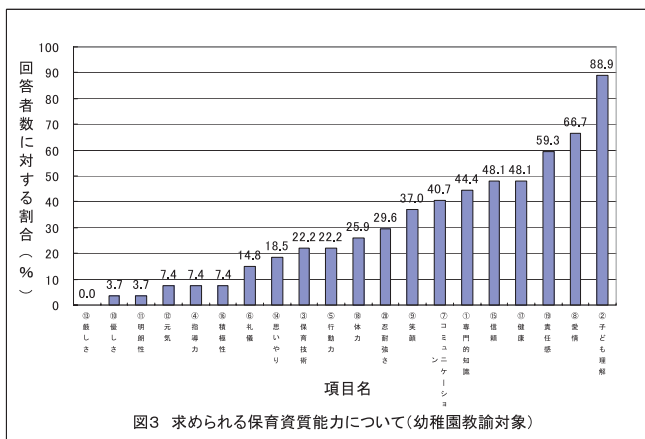
2. 現場の幼稚園教諭からのアンケート

現職の幼稚園教諭に対して、同じアンケートを行った。回答者数：27名。うち、女性26名、男性1名。経験年数は、1年から35年と幅広く、平均経験年数は、11年であった（図2参照）。

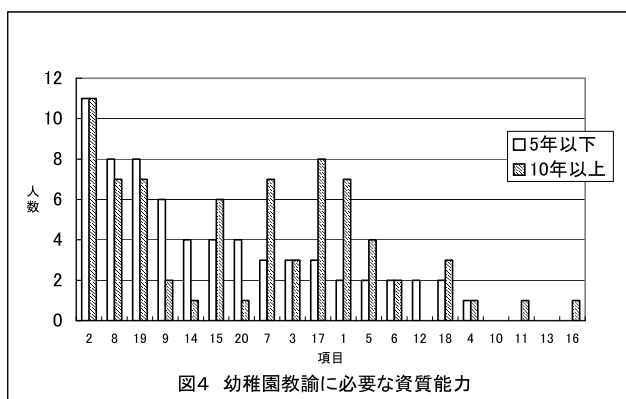


(1) 保育者に必要な資質能力

アンケート結果より、多いものから「子ども理解」、「愛情」、「責任感」、「健康」、「信頼」、「専門的知識」、「コミュニケーション」、「笑顔」と続く。資質能力のうち、回答者誰もが選択しなかった項目は「厳しさ」であった。項目としては、学生の結果と同じような結果が出た（図3参照）。



経験年数5年以下と10年以上の群に分けて分析した結果を図4に示す。特に経験年数5年以下の幼稚園教諭の場合、②子ども理解、⑧愛情、⑨笑顔、⑭思いやりなど、子どもとのかかわり、接し方、子どもとの関係をもつ、というようなものが多い。それに対して、経験年数10年以上の幼稚園教諭になると、1番多いもので、②子ども理解、2番目は⑰健康、3番目は⑧愛情、⑱責任感、①専門的知識、⑦コミュニケーションと、同値であり、4番目は⑤行動力の順に並んでいる。「責任感」、「信頼」などが経験年数5年未満の教諭に比べて異なっている。経験年数10年以上になると、責任感や忍耐強さ、コミュニケーション能力などが身についてくると考えられる。



5年未満と10年以上の群を比較した総合的な考察として、以下の3点である。

- 1 5年未満の教諭と実習生の選択順位は類似している。
- 2 自分のクラスや、自分の目の前にいる子どもたちへの配慮ができるということなどを保育者の資質能力とあげている。
- 3 自由記述の結果より、経験年数を重ねることによって、園全体、保護者との関係に配慮が向いていく。

保育者としての成長の過程をモデル化してみると、どのようにして保育者の専門性がつくりだされるかが明らかになると秋田（2000）は述べている。

その中の保育者の発達モデルでは、第一段階「実習生・新任の段階」は、「場に参加することから学ぶ段階である。指示されたことをその通りやってみるアシスタントとなったり、実際に保育で子どもに直接かわり、援助したり、世話することにもかかわる。自分自身の過去の経験や価値判断のみで対応することが多く、子どもの発達からその行為の意味やつながりを見ることができない。自分の自経験から先輩の助言に抵

抗することもあり、経験を重視し、本で学ぶ必要などが無い」とある。

第二段階「新任の段階」では、「保育室やあそびの場で、子どもに直接関わる場面で主に仕事を行う、理論で学んだことを保育に生かせるようになってきているが、自分の行った行為の理由や説明を言語化することは難しい。子ども達や親、同僚など他者の要求にしっかり応えようと思いつつ、自分自身を過剰に提供し、自己犠牲にしてしまう。新任期ほど、個人的な考えに偏った行動をとらなくなるが、まだ自分の価値体系に依存しやすい」とある。

第三段階「洗練された段階」では、「保育者としての専門家意識を強く意識し始めるようになり、実践者として自分を信頼し、落ち着きを見せてくるようになる。主観的な印象のみに頼るという次元を超え、現実の事実をよく見ることで判断の基礎ができるようになる。まだ、保育に直接影響を与えている要因変数を体系的に捉えたり、日常の実践の複雑な要求に対処する点では、完全に熟達していると言うわけではない」としている。

第四段階「複雑な経験に対応できる段階」では、「より複雑な問題や状況に対応できる知識や経験を得、個々の断片的な知識だけではなく、自らの経験ともの見方の参照、枠組みが統合されてくる。保育のスペシャリストとして、自律的に働くことができる。そして二つの方向での発達、すなわち直接的な実践や臨床側面でもより熟達していく方向と、園経営や他の若手教師の教育など、保育に関する間接的文脈に関わる方法のいずれか、あるいはその両方に関わるようになる。子どもの人格をより深く読み取る、個別の集団の要求に応じるシステムづくりをデザインできる」ようになる。

第五段階「影響力のある段階」では、「中年期から中年後半にあたり、身体的活動は低下、減衰する。しかし、それが新たな発達の機会、実践の複雑さや要求を新たな創造的視点から捉えたり、知恵を発達させるのに寄与する。現場の将来の発展を導くような仕事、子どもや家族の生活に影響を与える社会的なさまざまな問題についての条件の改善や保護に対して働きかけるようになる。親や保育者が参加するネットワークやその社会文化が持っている信念やマイクロシステムを強調し、自分の実践の作り手として主張できるだけでなく、他のスタッフへの責任も負うようになる」段階としている。

この秋田の報告を踏まえると、保育者としての専門的な資質は、子どもと直接関わる生活から、理論と結びつける時が来て、保護者や周囲の人々の願いや要求に対応して経験や知識を積み上げていくことになる。そして、「私の保育観」というものが築かれていく。次の段階としては、同僚から次の担い手を育てるという立場から確実な歩みになる。そして、園全体を運営していく指導的な役割を担っていくまでに成長していく。このように、保育者としての資質は、現場での経験に加えて子どもに対する深い愛情に裏付けられ、常に保育を考察し、つくりあげられていくものである、と考える。

第三章 本学のめざす教育実習のあり方について

実習生は、幼稚園実習を通じて、総合的にいろんなことを見てきて自分なりに捉えてはいるが、その捉え方は、まだまだ表面的で抽象的なものである。幼稚園実習を終え、事後指導あるいは講義の中で、それぞれの経験した保育実態の教育的意味を知ることが大切である。幼稚園実習あるいは保育所実習、その他の実習で現場での保育者の姿勢や考え方、人との接し方に感動し、憧れを抱き、その中で「めざす保育者像」を考えていくと思われる。

小川ら(2008)による実習園からのアンケート内容によると、学生に対する指導の内容が多岐に渡り、子どもへの関わり方から、言葉遣い、実習日誌の書き方、教材研究や環境構成など、実習の学びの基本的なものから、幼稚園教育要領など、園の定めた教育方針を踏まえることなどにまで及ぶ。おおむね、教育者としての心構えや教育者としての資質を身につけていくことが求められていた。

そのアンケート結果を踏まえて、それでは保育士や幼稚園教諭を養成する短大として、「保育者の資質」を人間成長ということにつなげると、教育課程の中に有機的に位置づけていくことが重要になってくると考える。有機的な位置づけとは、狭義な視点では、講義で学び身につけた保育技術(ピアノ演奏や合唱、絵本の読み聞かせ、劇づくり、パネルシアター発表など)を現場実習で生かしていくなどのカリキュラム内容が考えられ、また広義な視点では、幼稚園実習あるいは保育所実習、その他の実習での保育者像を一致させることができれば、全教育課程の編成が一貫したものとなり、保育者としての資質の育成に基づいたカリキュ

ラム編成が可能となる。そのように統一した養成校の教育は、学生の基礎的な資質向上となる。

この教育課程を考える上で、「人間性を豊かにする学び」や、「人間性としての成長」にかかわる学びに重点を置くか、それとも「保育の専門的知識」、「保育の専門的技術」を重視するかという問題が関わってくる。保育の専門的技術とは、歌ったり踊ったり描いたり作ったりすること、あるいは上手に遊ばせてやる技術、というような捉え方があるが、そうした技術は無いよりもあった方がよい。しかし、重要なのは、巧みなテクニックを持って自分の計画した活動を軌道に乗せる技術として行うのではなく、それを一人ひとりの子どもがどのように受け止め、どのように感じ、どのように取り組もうとしているのか、という視点で捉えていくことが専門的技術になる。一人ひとりの子どもの発達課題を理解した上で援助できることが重要なのである。技術が一人歩きするのでなく、子ども理解、人間的理解に支えられてこそ意味を持つものだと言える。要するに、技術と人間性は相互に支えあふ補完関係であり、深い子ども理解に支えられない専門性は無いのである。深い子ども理解に支えられた専門性が大切である。

そしてそれらの経験が専門的な理論に裏付けられていくことも必要である。そして、時代の変化の中の子どもの姿とともに、保育が変わっていく。変化に応じて対応し成長しうる保育者になれる資質を保育士や幼稚園教諭を養成する短大が身に付けさせていくべきことであると考ええる。

謝辞

本稿執筆にあたり、幼稚園教諭の先生方に実施したアンケート結果を使用しました。また、本学の幼稚園実習を履修する学生に対しても資料掲載について承諾いただきましたことを合わせて、感謝申し上げます。

参考文献

- ・ 秋田喜代美「保育者のライフステージと危機」別冊 発達83、21号 2000年、pp.48-52。
- ・ 浅野房雄「保育者像についての研究（2）—学生から見た望ましい保育者—」つくば国際短期大学31号 2003年、pp.89-102
- ・ 江田美代子「幼稚園教諭に求められる資質能力に関する調査研究」宮崎女子短期大学紀要 第34号、2007年、pp.31-46
- ・ 小川友恵・柴本枝美・山本弥栄子「教育実習指導のあり方（1）～教育実習Ⅰの結果をふまえて～」大阪健康福祉短期大学紀要「創発」第8号、2008年、pp.143-157
- ・ 栗原泰子「就職試験における保育者像について」河村学園女子大学研究紀要第11巻第2号、2000年、pp.121-145
- ・ 児島輝美「採用試験に見る保育者像と養成校の課題—幼保・地域による違いを通して—」徳島文理大学研究紀要第58号、1999年
- ・ 白石敏行「幼稚園教諭の資質向上のためのカリキュラムに関する研究」山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要第18号、2004年、pp.87-96
- ・ 高村和代・平野朋枝「学外実習を含む学習を通じた“目指す保育者像”の変容」岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要第40号、2008年、pp.29-36
- ・ 田爪宏二・小泉裕子「保育者志望学生の『保育者アイデンティティ』確立に関する検討—模擬保育の実践を通して—」鎌倉女子大学紀要第13号、2006年、pp.27-38
- ・ 中村勝美「保育学生の保育者像と保育者養成教育に関する一考察」永原学園西九州大学・佐賀短期大学紀要第36号、2006年、pp.139-146
- ・ 日本学術会議「これからの教師の科学的教養と教員養成の在り方について」2007年
- ・ 羽根田真弓「保育者養成校の課題と問題点—質問紙調査結果の分析から—」鳥取大学研究紀要第50記念号、2004年、pp.53-62
- ・ 文部科学省中央教育審議会 「平成9年7月教育職員養成審議会第一次答申『新たな時代に向けた教員養成の改善方策について』」、1997年。
- ・ 文部科学省「幼稚園教員の資質向上に関する調査研究協力者会議報告書」2002年。
- ・ 矢野博史・田浦智子「保育職希望者の保育者像に関する調査—より高い専門性を備えた保育者養成のために—」広島文化短期大学紀要33-35号、2002年、pp.1-10
- ・ 吉村栄・片岡基明・吉村啓子「保育者の資質に対する女子学生の意識—幼稚園教諭資質と保育士資質の比較—」京都女子大学発達教育学部紀要第3号、2007年、pp.43-58

Improving Guidance on Teaching Practice through Analysis of Current Teaching Method in Kindergartens II : A Consideration concerning "The Image of Child Care Workers that We Are Aiming at."

Yaeko Yamamoto*, Tomoe Ogawa**, Emi Shibamoto**

Abstract

Examining the contents of guidance before and after the practice in the previous study (Ogawa,T., et al., 2008), we can clearly find out that the students have embodied what they experienced in their practice. The purpose of this paper is to find the qualities and abilities of nursery teachers. In a survey of students and kindergarten teachers, students aspire to become high level nursery teachers. However, from the analysis of students' notes, they only want to get qualities and abilities that they can actually realize. So, we are requested to teach students not only the professionalism of nursery teachers, but also the way how to understand people as well as children.

Keywords: teaching practice, guidance on teaching practice, training curriculum of a kindergarten teacher

*Osaka College of Social Health and Welfare
Contact Address:
〒590-0014 8-2 Tadei-Cho,Sakai-Ku,Sakai City,Osaka
Osaka College of Social Health and Welfare
Department of Child Care and Education
E-mail : Ymmt-ye@kenko-fukushi.ac.jp
**Osaka College of Social Health and Welfare